

センター通信

知床森林生態系保全センター



「エゾシカによる食害」

知床森林生態系保全センターは、知床半島の貴重な森林生態系の保全や適切な自然地域の利用を促進するための業務を行っています。

主な業務は①魚類を遡上させるための河川工作物の改良の検討、②エゾシカ捕獲事業、③自然地域の適正利用の推進(登山歩道の巡視等)、④市民参加によるエゾシカ被害森林の再生活動と環境教育、⑤自然環境モニタリング(魚類遡上調査やミズナラ堅果結実調査など)を行っており、今回は冬に本格的に実施するエゾシカ捕獲事業をご紹介します。

現在、北海道全体でエゾシカによる森林植生・農作物への食害が問題になっていますが、知床半島でも特定の植物種の減少や樹皮剥ぎによる樹木の枯死など、生態系上の悪影響が現れています。

そこで、知床のエゾシカを適切な個体数に調整するため、関係機関が連携し、平成25年度から、世界自然遺産の隣接地域でエゾシカ捕獲事業を行い、これまでに162頭を捕獲しました。

捕獲事業は、大きく分けて「囲いワナ」と「銃猟(モバイルカリングなど)」の2通りの捕獲方法を採用してきました。

囲いワナは、その名のとおり鋼製パネル等で囲いを設置し、その中にエサを撒きエゾシカをおびき寄せて捕獲する方法で、経費はかかりますが、銃を使わないので比較的安全であり市街地や公道近くでも捕獲できるメリットがあります。

また、生け捕りが可能である利点もあり、養鹿施設を保有する民間事業

者にエゾシカを引き渡すことで処理経費の削減を図るとともに、事業者からは体重等個体データをフィードバックしてもらい、科学的な管理に繋がっています。

モバイルカリングは、林道の出入り口を封鎖して安全を確保し、エサでおびき寄せたシカを車上から射撃して捕獲する方法で、比較的経費が抑えられますが、銃器を使うためより徹底した安全管理が必要で

平成26年度に試行的に実施し7頭を捕獲しましたが、エゾシカの警戒心がとても強く、エサを食べるまで4日間程かかりました。

十分なエサ誘引期間を確保しないと捕獲数は伸びないと実感しました。

知床半島には多数の希少鳥類が生息しており、営巣に影響を与えないように、銃猟による捕獲は慎重に行う必要があるため、囲いワナによる捕獲をメイン手法としていますが、前述したとおり経費が高かかってしま

ます。

そのため、鳥類研究者の意見をききながら、実施可能と判断した場所ではモバイルカリングなど銃猟捕獲も実施する形をとっています。

堅調にも見えるエゾシカ捕獲ですが、エゾシカは繁殖力が強く、年20%のペースで増えるとともに、温暖化によりますます自然死が少なくなると言われています。

短期の結果に満足せず、民間活力を利用するなど、低コストで長期的に捕獲圧を加えることのできる仕組み作りが今後の課題です。



「エサに誘引されたエゾシカ」
(モバイルカリング)